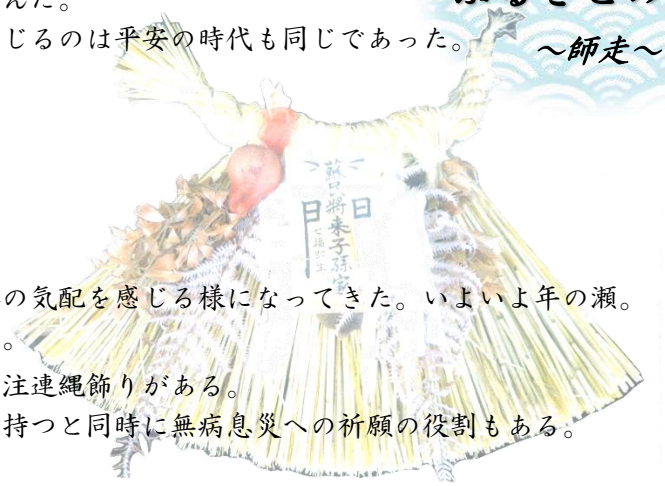
ふるさとの風
～師走～

「星はすばる。ひこぼし。ゆふづつ…」
― 枕草子　清少納言―

冬の夜空は一年中で最も豪華な輝きに彩られる。
日本では古来、プレアデス星団をすばる〔昴〕と呼んだ。
凍てつく空気の中、星々が瞬きあう様を美しいと感じるのは平安の時代も同じであった。

一 陽 来 復

― 神都伊勢の年迎え ―



師走の声を聞く。
二十四節気の大雪を過ぎる頃から、いつのまにか冬の気配を感じる様になってきた。いよいよ年の瀬。
日本各地で年迎えの風景があちらこちらで見られる。

迎春準備の中で欠くことのできないものの一つに注連縄飾りがある。
注連縄は聖域と俗界を区別する結界としての機能を持つと同時に無病息災への祈願の役割もある。
その起源は古く、古事記までさかのぼる。

即ち布刀玉命、尻くめ縄を以て其の御後方に控き度して、白して言ひしく、
「此より以内に還り入ること得じ」といひき。　　― 古事記 ―

須佐之男命の乱暴を怖れて天岩戸に隠れた天照大神を引き出した際、再び岩戸内に戻れぬよう張り渡した尻くめ縄がその始まりとされる。

新年を迎えるために掛けられた真新しい注連縄飾りは、松の内が過ぎるとはずされるのが一般的だが、伊勢志摩地方では一年中掛けておく風習がある。古くは桃の木を使用したため桃符と呼ばれる木札に書かれた「蘇民将来子孫家門」の文字はこの地方独特で次のような伝説がある。

その昔、伊勢の地を訪れた須佐之男命に、貧しいが慈悲深い蘇民将来が手厚くもてなし一夜の宿を貸した。須佐之男命は大変喜び旅立つ時「今後、蘇民将来子孫の門符を門口にかけておけば子孫代々疫病から免れる」と言い残した。以来、蘇民の家は禍いからも逃がれ代々栄えた。

鎌倉時代中期、卜部兼方によって記された「釈日本紀」には「備後国風土記逸文」として最も古い「蘇民将来」の逸話がみられる。

吾は速須佐雄の神そ。後の世に疫気あらば、汝、蘇民将来の子孫と云ひて、茅の輪を以ちて腰に着けて在る人は、免れなむ。

蘇民将来の伝説がある二見松下の地は、神宮から流れ出る五十鈴川の派流沿いにある。
静寂な雰囲気の森は蘇民の森とよばれ、この地の氏神松下社（通称蘇民社）が鎮座する。
平安中期、安倍晴明が建立したとも伝えられ、祭神は須佐之男命、菅原道真、不詳一座の三座。
宮域内にある大楠は、三重県の天然記念物で樹齢二千年といわれ、幽遠さをより一層漂わせている。

「蘇民将来子孫」と書かれた桃符の注連縄を配布する頒布初祭は毎年 12 月 16 日。
この地域の人々は古くから蘇民の子孫である証として門符をかけ無病息災を祈願している。

一年中伊勢の町で目にする注連縄 ――。
家の守り神として、そして今もなお蘇民将来のもてなしの心を伝えている。

大雪からかぞえて約 15 日目、一年でもっとも昼が短く夜が長い日が訪れる。冬至である。
そしてこの日を境に太陽は勢いを増し始め、少しずつ日脚も伸びていく。
天照大御神は太陽の化身、生命を育む神…。伊勢の地は古くから太陽崇拝の地とされてきた。
冬至の日、内宮宇治橋の鳥居中央から昇る朝日を拝む。

一陽来復――。
新しい年が幸多きことを祈りつつ…。

- 伊勢参宮名所図会　（蔀関月／画 編　原田幹／校訂　国書刊行会　L290／シ）
- 伊勢の文学と歴史の散歩　（中川竫梵／著　古川書店　L902／ナ）

図書館だより
2012年12月号より